

[研究ノート]

# 頼山陽の書作 「詠史絶句十二首屏風」に関する一考察

別 枝 行 夫  
張 忠 任

はじめに

1. 俵家所蔵の「詠史絶句十二首屏風」
2. 詩人・書家としての頼山陽
3. 「俵家屏風」の漢詩の読解
4. 「俵家屏風」の書の特徴

おわりに

はじめに

本稿は、最近島根県浜田市で発見された頼山陽晩年の書作となる「詠史絶句十二首屏風」の検討を目的とする。この屏風を長年所蔵していた家にちなみ、以下「俵家屏風」と呼ぶこととする。

「俵家屏風」の内容は詠史絶句である。詠史とは歴史上の事実を詠ずる詩歌の一種であり、絶句は漢詩の形式の一つで起・承・転・結の4句からなる。一句当たりの文字数から「五言絶句」、「七言絶句」に分かれる。「俵家屏風」は七言絶句の形式をとっている。詠史絶句は歴史と漢詩の両面に堪能な人物が著したものである。史才と詩才を兼ねる山陽が、どのようにして歴史研究（『日本外史』の著作）の成果を原点として、『日本楽府』の漢詩作りを経て、『詠史十二首』のような詠史詩に展開し、その頂点と言える『詠史絶句十五首』に到達したのかについて明らかにしたい。

「俵家屏風」は、多彩な趣味を持ち多分野で活躍した頼山陽が自分の詩作を書いた書作として、山陽の詩人と書家の両側面を意識して考察を行う価値がある。

本稿では、まず山陽が文人を経て詩人と書家になってゆく環境と教育歴の検討から始め、上記各著作とのかかわりを深く解明したい。

次に書道の面から「俵家屏風」を考察する。とくに山陽は、いかにして、父春水や米芾、董其昌のような書画の専門家の影響を踏まえて、ついには蘇東坡のような文人の書を彷彿させる独自の風格を確立しえたのか。そして、山陽の詩と書に特徴的に表れる「勢」（いきおい）はどのような特徴を持つのか。勢の概念を用いて、「俵家屏風」に見る書の風格を解釈してみたい。

## 1. 俵家所蔵の「詠史絶句十二首屏風」

最近島根県浜田市真光町で発見された「俵家屏風」は、島根県江津市本町の飯田家で明

治期の飯田源之丞の代に所蔵していたものであり、長男飯田豊の妻の実家である浜田市の俵家に明治43年に贈呈され今日にいたったため、伝承が確実であるといえる。

書道、篆刻と漢詩の研究を続けてきた著者（張）は、源之丞の曾孫である飯田統通氏に屏風の分析を委嘱されたため、本研究に至ったのである。

伝承が確実なる点において、研究上貴重な資料となる可能性が高いだろう。

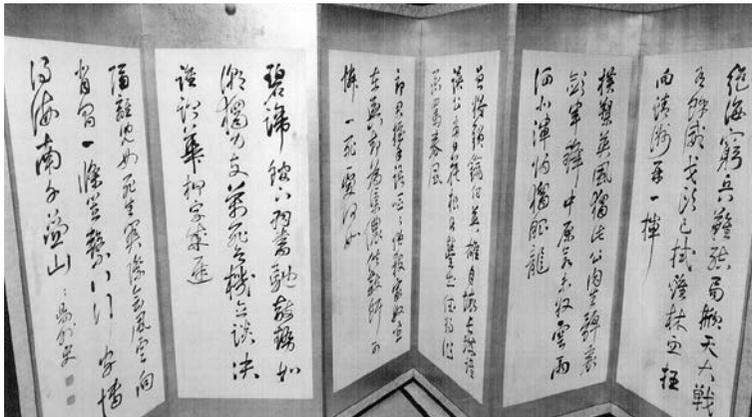
この屏風には、頼山陽の「詠史絶句」の中の十二首を書いた書作であり、六首一双の各隻に六場面ずつ、計十二場面を持つものである<sup>1)</sup>。

なお、分析の便益のため、「俵家屏風」について六首一雙のA、B隻と呼ぶ。A、B隻とも外寸は縦180、横300cmほど（写真1、写真2）である。

A隻の最後の場面における落款は、「々易外史（＝山易外史）」<sup>2)</sup>で、B隻の最後の場面における落款は「山陽外史」であった<sup>3)</sup>。また外函には、「名将詠史 山陽外史」とある。

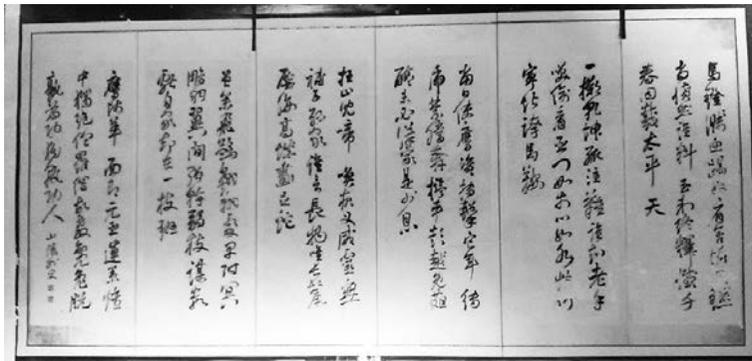
さらに具体的にいえば、「俵家屏風」におけるA隻の六場面にはそれぞれ島津義弘、伊達政宗、蒲生氏郷、中川清秀、小早川隆景、山内一豊を（図1参照）、B隻の六場面にはそれぞれ池田輝政、黒田如水、福島正則、加藤清正、藤堂高虎、本多正信を詠ったものである。

写真1 「俵家屏風」におけるA隻の様子（2019年現在）



撮影：飯田統通

写真2 「俵家屏風」におけるB隻の様子（1980年代）



撮影：飯田統通

## 2. 詩人・書家としての頼山陽

頼山陽（1781～1832年）<sup>4)</sup>は、江戸時代後期の儒者であり、歴史家、思想家、漢詩人、文人、書画家としても高名である。彼は、安芸国賀茂郡竹原（現広島県竹原市）の人、大坂（現・大阪）で生まれ、名は襄のぼる、字は子成あざな、号は山陽（雅号は、山陽外史、山易外史、三十六峯外史など）を用いた<sup>5)</sup>。主著としては、とくに幕末の尊皇攘夷運動に影響を与えた『日本外史』が挙げられる。

少年時代の山陽は、母梅颯（歌人）や叔父頼杏坪（儒学者、広島藩士）の教育を受け、詩文の才能を大いに発揮するようになったという。寛政12年（1800年）山陽は脱藩をはかり京都へ出奔して、叔父頼杏坪に捕まり連れ戻され、離れに3年間幽閉された。この幽居中に山陽は源平時代からはじまる武家興亡の歴史をテーマとした『日本外史』<sup>6)</sup>の初稿を著したのである。放免後に推敲を重ねて文政9年（1826年）に完成させた。文政10年（1827年）には江戸幕府老中・松平定信に『日本外史』<sup>7)</sup>を献じ、2年後に大坂の秋田屋など3書店共同で全22巻が刊行され、一躍天下の名士・文豪と称されるに至った。このことで、山陽にとって、「外史」という言葉が命につながるものとして認識され、山陽外史、山易外史、三十六峯外史などの雅号を用いるようになった。

少年期から詩文の教育を受けたことに加え『日本外史』の執筆経験を通して、山陽は日本歴史、作詩との接点を得た。このことが彼が詠史詩を作る原因となったと考えられる。

日本の新しい扉を開く一助となり、幕末尊皇攘夷志士の精神的支柱となったともいわれる『日本外史』は、武家の時代史であるが、歴史的事実に忠実であるとは言いがたい記事も散見され、先行諸史料との齟齬が多く、専門の学者たちからは刊行当初から散々に批判されたことがある。したがって、史伝小説の源流の一つと見ても良いであろう。ここでは、山陽の歴史研究と文学的才能との接点として考えることが適当であろう。

『日本外史』と漢詩を融合した成果として『日本楽府（がふ）』が挙げられる<sup>8)</sup>。それは、山陽が国史に題材を採った詩集で、文政11年（1828年）に完成し、2年後の文政13年（1830年）に出版された。なお、『日本楽府』もまた、史実をうたったと言いながらその描写には史料との食い違いが見られ、『日本外史』と似た傾向を持つと思われる。『日本楽府』は史才と詩才との結合によるものである。この点について、田能村竹田は「史才有る詩才無く、詩才有る史才無し。山陽は奄有兼出」と高く評価しているという<sup>9)</sup>。

『日本楽府』の後、山陽の詠史詩は多数生まれる。ただし、彼の詠史詩には故事の引用が多く、また漢語も難しいといわれている。山陽の詠史詩の中、菅茶山により「小日本史」と評価された『詠史十二首』がある。文化4年（1807年）に、28歳の山陽が作ったものである。文政10年（1827年）に48歳の山陽はまた「詠史（徳川家康）」を作った。この後、本稿の第3節で検討する『詠史絶句（十五首）』ができたのである。山陽は詠史詩の完成に熱意を注いでいた。

山陽を、さらに文人への道へ歩ませる契機は、文化8年（1811年）に彼が京都へ出奔し、洛中に居を構え開塾したことにあるだろう。山陽は門人らを教えつつ日本各地を周遊し文人墨客と交わったことで彼の周辺には、京坂の文人が集まり、一種のサロンを形成した<sup>10)</sup>。

山陽は最初、詩人として知られた。そしてやがて史家としての名声がそれに雁行したと思われる<sup>11)</sup>。また、彼は、書家としても有名であるが、とくに近年中国では書家としての山陽を取り上げることが多くなった<sup>12)</sup>。

続いて、詩人山陽、書家山陽の両面から「俵家屏風」を具体的に考察しよう。

### 3. 「俵家屏風」の漢詩の読解

「俵家屏風」における漢詩は、『詠史絶句（十五首）』の中の十二首である。『詠史絶句（十五首）』は『山陽遺稿詩』に収められている。

頼惟勤（1996）によると、『山陽遺稿詩』は文政9年<sup>13)</sup>（47歳）から歿年（天保3年）まで（1826～1832年）の詩であり、編年の形式で、門人の手により編纂されたものである<sup>14)</sup>。それは、天保12年（1841年）に五玉堂（菱屋）により出版された<sup>15)</sup>。

ここで一つ興味深い「異同」を指摘したい。『山陽遺稿詩』<sup>16)</sup>における「詠史絶句」は十五首からなっているが、水田紀久ほか（1996）の『菅茶山頼惟勤山陽詩集』では『山陽遺稿詩（抄）』として十二種が採録されている。そこでは元の十五首から1番、9番および13番を除いて、その掲載順は「2、3、4、5、6、8、7、10、11、12、14、15」であり<sup>17)</sup>、すなわち7番と8番を入れ替えてある。ところが今回の「俵家屏風」の漢詩は、同じく十二首を採録するものの、元の十五首から3番、4番および7番を除いて、「1、2、5、6、8、9、10、11、12、13、14、15」である。つまり、『詠史絶句（十五首）』の取捨および配列において、「俵家屏風」が山陽自身の手になるとの前提に立てば『山陽遺稿詩（抄）』の編集者らと山陽の考え方とは相違していることになる。

次に『詠史絶句（十五首）』の作成時期については、『山陽遺稿詩』が基本的に編年の形式で編纂されたと考えれば、文政12年（1829年）～文政13年（1830年）の間だと推定できる。その理由については以下の通りである。まず、『山陽遺稿詩』（一）の最後のところに「送柘君續帰河内」（後ろから3番目の詩）があり、その追加文には「時己丑臘月也」と記している。山陽の生涯（1781～1832年）において、「己丑年」は1829年だけである。『山陽遺稿詩』（二）では、「詠史絶句（十五首）」の次に収められた詩が、「庚寅六月省母氏病西下会赤関広江生来未数日而別」である。山陽の生涯で「庚寅年」は1830年しかない<sup>18)</sup>。つまり、『詠史絶句（十五首）』は、1829～1830年の間に完成したものだと思われるのが順当である。

次に、A隻から「俵家屏風」における漢詩を一つ一つ検討しよう<sup>19)</sup>。

A一は、鳥津義弘を詠ったものである。それは、『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の1であるが、『山陽遺稿詩（抄＝十二首）』には含まれていない。「俵家屏風」では、原詩（十五首）の通り最初に書かれている<sup>20)</sup>。

原詩	訳文
絶海窮兵難結局	絶海の窮兵 局を結び難し
掀天大戦有餘威	掀天の大戦 余威あり
戈頭已拭雞林血	戈頭 すでに雞林の血を拭ひ
枉向蜻洲再一揮	枉げて蜻洲に向かつて再び一揮す

A二は、伊達政宗を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の2（『詠史絶句（十二首）』の1）であるが、「俵家屏風」においても、原詩のまま書いている。

原詩	訳文
横槩英風獨此公	槩を横たふ英風 独り此の公

肉生髀裏斂軍鋒	肉髀裏に生じて 軍鋒を斂む
中原若未收雲雨	中原 若し未だ雲雨収まらずんば
河北渾歸獨眼龍	河北 渾て帰せん 独眼龍

A三は、蒲生氏郷を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の5（『詠史絶句（十二首）』の4）であるが<sup>21)</sup>、「俵家屏風」では、1行目が違っている（意味も変化）。「俵家屏風」における1行目は以下の通りである。

「俵家屏風」1行目	訳文
曾将鎖鑰付英雄	曾て鎖鑰を <sup>もち</sup> 将て英雄に付す

A四は、中川清秀を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の6（『詠史絶句（十二首）』の5）であるが<sup>22)</sup>、「俵家屏風」では、1行目は違っている（意味はほぼ同じ）。「俵家屏風」における4行目は以下の通りである。

「俵家屏風」4行目	訳文
可憐一死復何如	憐れむべし 一死を <sup>ま</sup> 復た何如せん

A五は、小早川隆景を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の7であるが、『詠史絶句（十二首）』には採られていない。「俵家屏風」では、原詩のままである。

原詩	訳文
碧蹄館下羽書馳	碧蹄館下に羽書馳せ
敵勢如潮獨力支	敵勢潮の如く 独力もて支ふ
萬死兵機立談決	万死の兵機 立談に決す
誰論華押字成運	誰か論ずる 華押 字成こと遅し

A六は、山内一豊を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の10（『詠史絶句（十二首）』の8）であるが<sup>23)</sup>、「俵家屏風」では、4行目は違っている（意味はほぼ同じだが、これによって『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』における1つの誤植を解明することができる<sup>24)</sup>）。「俵家屏風」における4行目は以下の通りである。

「俵家屏風」4行目	訳文
博得海南千疊山	博して得たり 海南千疊の山（海南千疊の山を得る）

続いて、B隻の検討に入る<sup>25)</sup>。

B一は、池田輝政を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の8（『詠史絶句（十二首）』の6）であるが<sup>26)</sup>、「俵家屏風」の4行目では1文字が違っている（意味は同じ）。「俵家屏風」における4行目は以下の通りである<sup>27)</sup>。

「俵家屏風」4行目	訳文
千春同戴太平天	千春 同じく戴く 太平の天

B二は、黒田如水を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の11（『詠史絶句（十二首）』の9）であるが、「俵家屏風」においても、原詩のままである。

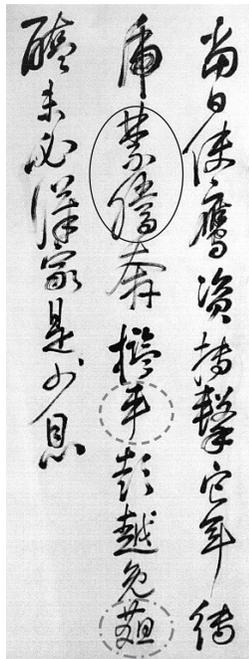
<p>原詩</p> <p>一擲乾坤孤注難 誰知老手咲傍看 臣門如市心如水 此脚寧堪跨馬鞍</p>	<p>訳文</p> <p>一擲乾坤 孤注の難 誰か知らん老手 咲って傍看 臣が門 市の如きも 心 水の如し 此の脚 寧くんぞ馬鞍に跨るに堪えん</p>
--	---

B三は、福島正則を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の10（『詠史絶句（十二首）』の10）であるが<sup>28)</sup>、「俵家屏風」では、4行目が違っている（意味も微妙に変わる）。「俵家屏風」における4行目は以下の通りである。

<p>「俵家屏風」4行目</p> <p>未必漢家は少恩</p>	<p>訳文</p> <p>未だ必ずしも漢家 是れ少恩ならず</p>
---------------------------------	-----------------------------------

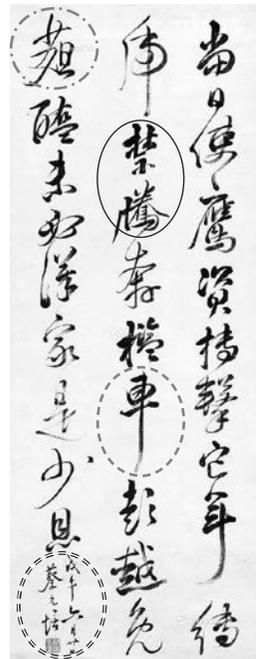
同詩を使った書作として蔡元培（1868～1940年）が北京大学長在任中の戊午年（1918年）6月20日に書いた掛軸があるが、そこでも「未是漢家真少恩」ではなく「未必漢家は少恩」としている（写真3参照）。そして、二つの書法は非常に良く似ている（細部では異なる字体もある。丸囲みを付けたところを参照されたい）。蔡元培は書道家ではないため贋作の可能性は考えにくい。蔡元培の模作だとしても日本留学の経験がない蔡と山陽を結びつけるのはなかなか困難であるが、書道を高めるために山陽の書作を模写した可能性があるかもしれない。

写真3 頼山陽と蔡元培の書道の対比



頼山陽

（「俵家屏風」より）



蔡元培

（芸術品競売目録より）<sup>29)</sup>

B四は、加藤清正を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の13であるが、『詠史絶句（十二首）』に採られていない。「俵家屏風」では、原詩のままである。

原詩	訳文
枉止児啼喚夜叉	枉げて児啼を止むるに夜叉と喚く
威靈無補子孫家	威靈 補ふなし 子孫の家
誰言長物唯長鬣	誰か言ふ長物 唯長鬣 と
歴海高城畫足蛇	海を圧する高城も足蛇を画く

B五は、藤堂高虎を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の15（『詠史絶句（十二首）』の12）である。「俵家屏風」においても、原詩のままである。

原詩	訳文
曾參飛鷁翱翔處	曾て飛鷁 翱翔の処に参し
早附冥鵬羽翼間	早く冥鵬 羽翼の間に附す
強幹弱枝謀数献	幹を強くして枝を弱くする 謀数献す
自家却在一枝班	自家 卻つて一枝の班に在り

B六は、本多正信を詠ったものである。『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』の14（『詠史絶句（十二首）』の11）であるが<sup>30)</sup>、「俵家屏風」の3行目が違っている（意味はほぼ同じ）。「俵家屏風」における3行目は以下のとおりである<sup>31)</sup>。

「俵家屏風」3行目	訳文
羅網故教龜兔脱	羅網 故らに龜兔を教つて脱かせしむ

#### 4. 「俵家屏風」の書の特徴

頼山陽の書について、藤原茂（1940）は、「もともと率意の書、才気澆刺として気魄に富み、天真よく流露す。書は董、米を学ぶという」と評価している<sup>32)</sup>。

また、富田富貴雄（1987）は、「山陽ははじめ、父春水の書を学び、長じて董其昌の書を、晩年には宋の米芾の書も学んだ。しかし、山陽は古人の書の模倣をせず、独自の書を書いた」と記し、山陽51歳の書作『雨窓与細香話別』について、「全く円熟の域に入っている」-とした<sup>33)</sup>。ここで、富田（1987）は、とくに藤原（1940）が指摘した「董、米を学ぶ」ことについて、董其昌から始まり米芾へと移行したと具体的に示した。

笠嶋忠幸（2015）は、文人の学書表現と高僧や専門書家の書表現を分け、頼山陽は江戸時代後期を代表する文人で、多彩な趣味を持ち、多方面で活躍し、独自の書風を確立して、専門書家の作風とは特徴が異なっていると指摘している<sup>34)</sup>。

また、頼山陽の書について、頼山陽史跡資料館は、次のようにまとめている<sup>35)</sup>。

頼山陽の書は歳を追うごとに変化していったと思われる。青年期の作品は、父春水の影響が強く出ている。30代、壮年期には次第に独自の書風を確立していく。36歳から、山陽自らが一変し、字と字の間が拡がり、柔らかい印象を受ける。40代後半、中年期の頼山陽の書きぶりに特徴的な「山陽流」というべきスタイルが確立される<sup>36)</sup>。50歳代、書を極めた時期であり、米芾風から蘇東坡に代表される典型的な文人の書に傾倒していく。文字は躍動感に溢れ肉厚になり、結構も縦長から円形へと変化する。「形骸」から離脱し、蘇東坡の

いう「神・気・骨・肉・血」の一体的書境に通じる骨力と肉づき、生氣となって自在な新  
生面を切り開く。この時期の書を評して、「抑制の効いた力強さ」という言葉が使われる<sup>37)</sup>。

ここで、とくに頼山陽の書はさらに米芾から蘇東坡へと変わったことを指摘している。  
なお、前述した通り、「俵家屏風」は晩年の山陽の書作である。そこで見せる山陽の書は、  
米芾や董其昌のような専門家の書の学びを踏まえ、蘇東坡のような文人の書の影響を受け  
たとしても、独自の風格を確立したといえる。この点については、山陽にはいわゆる「勢」  
が形成されたと解釈できる。書道上の「勢」に関して、趙坤傑、董凡（2012）によると、  
董其昌が指摘したように米芾は錢穆父の指導を受け集古字（古典を中心にこれまで各種の  
書法で書いた字を集めて学ぶこと）をやめ、「勢」<sup>いきおい</sup><sup>38)</sup>を得てから書道が大きく進んだとい  
う<sup>39)</sup>。このように考えると、「俵家屏風」に見るとおり、晩年の山陽は書の勢を得たといえ  
る。

ただし、山陽に形成された「勢」は2つあり、もう一つは詩の勢であった。詩人と書家  
を兼ねる山陽は、書の勢を通じて詩の勢を具現化するのである。この2つの山陽の勢を  
「淋漓」<sup>りんり</sup><sup>40)</sup>という言葉で一括できるかと考えられる。つまり、山陽は、「墨痕淋漓」<sup>ぼっこんりんり</sup><sup>41)</sup>の書の  
勢を通じて、彼の気持ちを十分に反映した「淋漓尽致」<sup>りんりじんち</sup><sup>42)</sup>の詩の勢を具現化するのである。  
また、山陽の書法の円熟度は頂点を極め、頼山陽史跡資料館が指摘した「抑制の効いた力  
強さ」<sup>43)</sup>というよりも、すでに自由自在な域に達しているといえる。

「俵家屏風」の書には、時には雄渾豪壮な風格、時には凜然たる風格、時には鷹揚な風格  
が見えるが、それは詩の勢にしたがって書の勢が変わることを示しているよう。

## おわりに

本稿は浜田市で新たに発見された「俵家屏風」について頼山陽の詩人と書家の両面を中  
心に考察してきた。本稿を通じて、明らかになった点はおよそ以下の通りである。

「俵家屏風」に書かれた「詠史絶句十二首」は『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』から  
選出されたもので、つまり山陽が自分の詩作で作った書作であった。その作成時期につい  
て、『詠史絶句（十五首）』が1829～1830年（文政12～13年）の間に完成した根拠を示した  
上で、晩年の頼山陽の書作であると判断した。「俵家屏風」に見る書の円熟度もこの結論の  
傍証となる。

「俵家屏風」の内容としての詠史絶句は歴史と漢詩の両面を持つものである。この両面か  
ら考察すると、史才と詩才を兼ねる山陽は、少年期以降受けた詩文教育によって作詩に親  
しむようになり、そして歴史研究である『日本外史』に取りくんだことから、詩人と史家  
を兼ねることになる。歴史と漢詩の接点となる成果として、まず『日本楽府』が生まれた。  
それから、詠史詩として七言律詩（一句が7文字）の『詠史十二首』に展開してゆき、最  
後に七言絶句（一句が7文字）の『詠史絶句十五首』が完成した。なお、平仄の配置は問  
わず、一句の字数、一首の句数も一定しない楽府より、8句からなる律詩の方が難易度は  
高い。さらに8句からなる律詩と比べて、4句からなる絶句の方が内容が凝縮されるため、  
より高い総括力が必要になる。したがって、『詠史絶句十五首』は山陽の詠史詩の頂点を極  
めた作品といえるだろう<sup>44)</sup>。加えて『詠史絶句十五首』は山陽の詩の勢いを遺憾なく発揮し  
た作品であった。

また、書道の面から「俵家屏風」を考察すると、山陽は、父春水から学びはじめ、米芾

や董其昌のような専門家の書を踏まえた上でこれを超越して、蘇東坡のような風格に向けて転化した。最終的には書道上の「勢」の形成に伴って、自由自在の域に達して、文人の書としての独自の風格を確立したと言えるであろう。

詩と書における山陽の「勢」は一脈通ずるものがある。それを「淋漓」で括るならば、山陽が自分の詩で書いた書作は、「墨痕淋漓」の書の勢を通じて、「淋漓尽致」の詩の勢を具現化したものとなる。よって、「俵家屏風」には、詩の勢にしたがって書の勢が変わる妙味が見られる。この点は、「俵家屏風」を味わうとき、一つのポイントとなる。

最後に、本稿の「俵家屏風」を通した山陽研究には、まだまだ多くの課題が残されている。『詠史絶句十五首』に限定せず幅広い作品群から分析を進めるべきであるとのご批判も考えられる。大方のご叱正を待ちたい。

## 注

- 1) 頼山陽は類似の屏風書作も複数作ったことがある。例えば、2009年11月27日より、ウェスティンホテル大阪（大阪市北区大淀）で、「～戦国絵巻～大阪冬の陣」の一環として、頼山陽が安土桃山時代の武将6人（加藤清正、小早川隆景、福島正則、中川清秀、伊達政宗、黒田孝高）を詠った『詠史絶句六曲屏風』を飾ったことがある（「頼山陽の『詠史絶句六曲屏風』」、『梅田経済新聞』2009年12月11日。<https://umeda.keizai.biz/headline/648/>。2020年6月25日アクセス）。また、日本美術の国際聚蔵館（福山市元町）は、2015年2月11日から4月12日まで、春季所蔵品展「雄渾と浪漫と～頼山陽『詠史絶句十五首のうち十二首屏風』と文人の書画展～」を開催したことがある。開催ポスターを参照されたい（<https://keizai.info/green/16891>。2020年6月25日アクセス）。ただし、この十二首の内訳については記載がない。頼山陽の書作の一種として類似の屏風は複数存在しても、後述するように、「俵家屏風」には特徴があるため、研究価値があるといえる。
- 2) 最後の詩句における「博得海南千里『山』」に次いで書いた落款であるので、「々易外史」となっているが、「山易外史」と読める。
- 3) 「山陽外史」も「山易外史」も頼山陽の号であるが、次節で詳しく述べている。
- 4) 頼山陽は旧暦で安永9年12月27日に生まれた。西暦では1781年1月21日となる。富田富貴雄はこれを1780年と誤っている。富田富貴雄『日本書道史概説』、西日本法規出版、1987年、236頁。
- 5) 頼惟勤（1972）によると、ほかには、改亭、悔亭、憐二、有礙などもある。ただし、「憐二」については、揖斐高（2012）によると、「山陽は座敷牢に幽閉され、名前も憐二と改められた」という。揖斐高訳注『頼山陽詩選』、岩波書店（岩波文庫）2012年、337頁。
- 6) 外史とは民間による歴史書で、野史の性格を持つようなものである。なお、中国語では、「外史」が小説名に使われることもあり、例えば、名著としての吳敬梓著『儒林外史』や不肖生著『留東外史』がその例である。
- 7) 『日本外史』（全22巻12冊）は、前漢司馬遷の『史記』の体裁に習い、武家13氏の盛衰を家別・人物中心に情熱的な文章で生き生きと述べたものである。司馬遷の『史記』は「十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列伝」の全百三十巻からなるが、山陽はこれを模倣して「三紀・五書・九議・十三世家・二十三策」の構成を立てた。
- 8) それは、中国の李東陽（1447年～1516年）の『擬古楽府』に倣って、日本の古代から安土桃山時代までの歴史を歌謡風に詠じたものである。66闕（首）からなる。
- 9) 前掲揖斐高訳注『頼山陽詩選』、361頁より再引用。

- 10) 最初は、父春水の友人の子供たちであった。例えば大坂の儒者篠崎三島の養子・小竹、京都の蘭医小石元俊の子・元瑞、京都の浦上玉堂の子・春琴などが挙げられる。その後、山陽の交友は、北条霞亭、武元登々庵、猪飼敬所、新宮涼庭たちに広がった。中村真一郎著『頼山陽とその時代』、ちくま学芸文庫、2017年、290～357頁を参照されたい。
- 11) 中村真一郎同上書578頁。また、明治16年（清光绪9年、1883年）に中国姑蘇春在堂が出版した俞樾『東瀛詩選』には頼山陽の詩が収められている。俞樾は山陽の詩を「子成は天才警抜にして詩学に尤も深し」と評している（前掲揖斐高訳注『頼山陽詩選』、326頁）。『日本外史』は1864年（元治元年、清の同治3年）に中国に伝わったという（蔡毅「頼山陽『日本外史』の中国への流布」『日本漢文学研究』第12巻、2017年）。
- 12) 中国では頼山陽の書作は人気が上がってきている。「新浪網」などにおいても紹介されている。頼山陽の書を「毫無塵俗氣息」（人間塵俗の気は全くなく、脱俗の風格を指す）と評価されたことがある。梁基永「一代儒者頼山陽」『信息時報』2017年9月17日（[http://epaper.xxsb.com/html/content/2017-09/17/content\\_705765.html](http://epaper.xxsb.com/html/content/2017-09/17/content_705765.html)）。また、「龍蛇飛動」（龍や蛇が飛ぶように動く）と評価されたこともある。書画圈「200年前日本漢学家頼襄：性格豪邁、書法龍蛇飛動」新浪網2020年4月2日（[https://k.sina.cn/article\\_2040162184\\_799a6788001007a0v.html](https://k.sina.cn/article_2040162184_799a6788001007a0v.html)）。
- 13) 実際には文政5年（1822年）の詩作にまで遡れる。『山陽遺稿詩』（二）には「閏三月六日劉溥卿之子元載來訪曰溥卿継来」とある。山陽の生涯（1781～1832年）において、閏三月が生じたのは、1784年（山陽3歳）、1811年（30歳）、1822年（41歳）しかないので、この詩は1822年作と判断できる。
- 14) 頼惟勤「頼山陽とその作品」、水田紀久、頼惟勤、直井文子校注『菅茶山頼山陽詩集』（新日本古典文学大系66）、所収、岩波書店1996年、386頁を参照されたい。
- 15) 安藤英男「頼山陽品行論序説」『國土館大學武徳紀要』第5巻、1988年。
- 16) 本稿で参照している『山陽遺稿詩』は、以下のA、B二つの文献に基づいている。
- A. 『山陽文詩遺稿』（五玉堂＝菱屋孫兵衛）、天保12年（1841年）、早稲田大学図書館所蔵（[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he18/he18\\_00825/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he18/he18_00825/index.html)）。
- B. 『山陽遺稿・詩』（竹岡文祐）、明治12年（1879年）、早稲田大学図書館所蔵（[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16\\_01801/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16_01801/index.html)）。
- 17) 前掲水田、頼、直井校注『菅茶山頼山陽詩集』、323～327頁。
- 18) 頼山陽「略年譜」における天保元年の条にも「六月母の病氣を聞いて広島に帰り」と記している。前掲中村真一郎『頼山陽とその時代』（下）、633頁。
- 19) 訳文については、前掲水田、頼、直井校注『菅茶山頼山陽詩集』に登場する場合に限り引用する。
- 20) 説明：雞林は、最初は朝鮮の新羅の別名、のち全朝鮮の別名となる。蜻洲（あきつしま）は、日本の古称である。
- 21)
- | 原詩      | 訳文               |
|---------|------------------|
| 曾捐大鎮圧群雄 | 曾て大鎮を捐てて 群雄を圧せしめ |
| 自壞長城誰誤公 | 自から長城を壊つ 誰か公を誤る  |
| 当日花根占豊土 | 当日 花根 豊土を占む      |
| 休將作悪罵春風 | 作悪を將て 春風を罵るを休めん  |

22) 原詩 訳文  
 郎君握手語嘔々 郎君 手を握って 語嘔々  
 憎殺家奴坐在輿 憎殺す家奴 坐して輿に在り  
 却為渠僮供敵餌 却って渠僮の為に 敵餌供に供せらる  
 惜君一死意何如 惜しむ 君が一死 意何如

23) 原詩 訳文  
 隔離兒女死生関 隔離の兒女 死生関し  
 際会風雲向背間 際会す風雲 向背の間  
 一條笠繫八行字 一條笠に繫ぐ 八行の字  
 伝得海南千里山 伝へ得たり 海南 千里の山

24) 『山陽遺稿詩・詠史絶句（十五首）』や『詠史絶句（十二首）』でも、「伝得海南千里山」としている。ただし、「一條笠繫八行字」は、いわゆる「笠の緒文（かさのおぶみ）」や「笠の緒の密書」のことで、山内一豊はこの「密書」の貢献によって新たに土佐国20万2600石を与えられたという（南海は土佐国を指すこと）。これは明白に「伝得」ではなくて、「博得」のことである。したがって、「伝得」は、山内一豊に関する「一條笠繫八行字」の史実に合わないことが分かる。「博得」のほうが適切である。なお、渡部（2005）では、「博得」としている（「博シテ得タリ海南千里ノ山」、132～133頁）。

25) 訳文については、前掲水田、頼、直井校注『菅茶山頼山陽詩集』に登場する限り引用。

26) 原詩 訳文  
 馬鐙濺血踢奴肩 馬鐙 血を濺いで 奴の肩を踢く  
 含垢回鑣尚憤然 垢を 含んで鑣を回すも尚ほ憤然  
 誰料玉氷終釋憾 誰か料らん 玉氷 終に憾みを釈て、  
 千春共戴太平天 千春 共に戴く 太平の天

27) 漢詩では、「同戴」の例文としては、明の戚継光『三屯新城工成志喜』には「千秋同戴漢家恩」が挙げられる。

28) 原詩 訳文  
 當日使鷹資搏擊 當日 鷹を使って 搏擊に資し  
 它年縛虎禁騰奔 它年 虎を縛して騰奔を禁ず  
 檻車彭越免菹醢 檻車の彭越 菹醢を免る  
 未是漢家真少恩 未だ是れ漢家 真に少恩ならず

29) <http://auction.163ks.com/sale-22044.html>. <http://www.artnet.com/artists/cai-yuanpei/luzalunshicalligraphy-BmOTfVDP1sWJfPOEocbbGg2>. また、<http://auction.163ks.com/sale-22044.html>（ともに2020年9月10日アクセス）。

30) 原詩 訳文  
 鷹師革面即元臣 鷹師 面を革めて 即ち元臣  
 運策帷中獨絶倫 策を帷中に運らして 独り絶倫  
 羅網故縱狡兔活 羅網 故らに狡兔を縦って活かせしは  
 孰為功狗孰功人 孰れか功狗たり 孰れか功人

31) 兔とは、狡兔のことである。『説文解字』（第十篇上）では、「兔、狡兔也。小雅巧言傳曰。兔、狡兔也」と述べている。

32) 藤原茂編『書鏡』（第5版）柳原書店、昭和15年（1940年）、119頁。なお、董、米は、中国の有名

- な書道家董其昌（1555～1636）、米芾（1051～1107）を指す。
- 33) 前掲富田富貴雄『日本書道史概説』、236～237頁。
- 34) 笠嶋忠幸「文人の学書と書作をめぐる試論：頼山陽の周辺」『出光美術館研究紀要』第21巻、2015年。
- 35) 頼山陽史跡資料館「頼山陽の書～その見方と味わい方～」<http://petitclimber.blog69.fc2.com/blog-entry-757.html>（2020年9月10日アクセス）。
- 36) 一つは、内に抑える力（内懸：ないよう）と外に押し開く力（外拓）という両極を掌中で調和させた秀潤な風格である。二つは、「右肩上がり」の横画で文字の左下側に重心を傾け、奥行きを広く、懐を深くとった生動感溢れる結構である。
- 37) 同館は、山陽の書の特徴については、筆致、線について①ためらいの無い、まさに刃物で切るような線である。②点・画に濁りがない。③余白はきちんと確保され、画と画が重なって潰れたりしていない。そして、④墨の量について、「気」や「韻」が発揮しやすい墨量で揮毫してあるとも指摘している。
- 38) 書道上の「勢」<sup>どきかい</sup>は、法家のいう「勢」（君主が有する権勢）ではなく、書の勢いを指すことばである。また、山陽の歴史観に関しても「勢」<sup>ぜい</sup>の概念が見られる。それは、時運にかかわるもので、歴史を形成する原動力で、人間は背くことができないが、人間は「勢」<sup>ぜい</sup>を制<sup>コントロール</sup>為<sup>コントロール</sup>することができる<sup>コントロール</sup>と山陽は考え、人間が歴史に主体的関わる根拠として位置づけられるとしている。前掲揖斐高訳注『頼山陽詩選』359頁を参照されたい。
- 39) 趙坤傑、董凡「董其昌論米芾書法管窺」『中国書画』、2012年第5号。
- 40) 「淋漓」は、水などが滴るような瑞々しい筆勢、非常に勢いのある様子を指す。
- 41) 墨を使って書かれたものが生き生きとしている様子を指す。
- 42) 詩や文章に勢いがあり、思いの全てが込められていることを指す四字熟語である。
- 43) 「抑制の効いた力強さ」は孔子のいう「心の欲する所に従えども矩を踰えず」の境界に当たるかと考えられる。しかし、山陽の生涯を考察すると、このような「抑制」は考えにくい。「勢」に関するこの項は、前掲揖斐高訳注『頼山陽詩選』などを参考に筆者がまとめたものである。
- 44) 頼山陽はもともと七言絶句を好み（律詩や排律は得意ではなく）、西遊の後、形式的な束縛がほとんどない古詩を得意としたが（とくに『日本楽府』）、この事実で山陽の詩風が転換したといえるかは問題となる。山口句「揖斐高訳注 岩波文庫『頼山陽詩選』」（『成蹊国文』第46巻、2013年）を参照されたい。

## 参考文献

- 安藤英男「頼山陽品行論序説」（『國土館大學武徳紀要』第5巻）、1988年。
- 揖斐高訳注『頼山陽詩選』岩波文庫、2012年。
- 笠嶋忠幸「文人の学書と書作をめぐる試論：頼山陽の周辺」（『出光美術館研究紀要』第21巻）、2015年。
- 蔡毅「頼山陽『日本外史』の中国への流布」（『日本漢文学研究』第12巻）、2017年。
- 趙坤傑、董凡「董其昌論米芾書法管窺」（『中国書画』2012年第5号）。
- 富田富貴雄『日本書道史概説』西日本法規出版、1987年。
- 中村真一郎『頼山陽とその時代』ちくま学芸文庫、2017年。
- 藤原茂編『書鏡』（第5版）柳原書店、1940年。
- 水田紀久、頼惟勤、直井文子校注『菅茶山頼山陽詩集』（新日本古典文学大系 66）岩波書店、1996年。

山口句「揖斐高訳注 岩波文庫『頼山陽詩選』(『成蹊国文』第46巻)、2013年。

頼惟勤「頼山陽とその作品」、前掲水田、頼、直井校注『菅茶山頼山陽詩集』所収、1996年。

頼惟勤編『頼山陽』(日本の名著28)中央公論社、1972年。

頼山陽『山陽文詩遺稿』(菱屋孫兵衛ほか刊)、天保12年(1841年)、早稲田大学図書館所蔵 ([https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he18/he18\\_00825/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he18/he18_00825/index.html))。

頼山陽『山陽遺稿・詩』(竹岡文祐ほか刊)、明治12年(1879年)、早稲田大学図書館所蔵 ([https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16\\_01801/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16_01801/index.html))。

頼山陽史跡資料館「頼山陽の書～その見方と味わい方～」(<http://petitclimber.blog69.fc2.com/blog-entry-757.html>)。

渡部淳『検証・山内一豊伝説「内助の功」と「大出世」の虚実』講談社〈講談社現代新書〉、2005年。

キーワード：山陽遺稿、詠史絶句、漢詩、書道、頼山陽

(BESSHI Yukio, ZHANG Zhongren)

